

ワークショップ いよいよ日本でも 遺伝子組み換え作物の出番か ～食料安全保障のあり方を考える生産者のホンネトーク～

▶2022年12月16日（東京都中央区）

去る2022年12月16日、都内で遺伝子組み換え（GM）作物に関するワークショップが開催された。題して「いよいよ日本でも遺伝子組み換え（GM）作物の出番か ～食料安全保障のあり方を考える生産者のホンネトーク～」である。会場には全国各地から生産者を含む60名近くが参集し、ほかに数十名のオンラインの視聴者もいた。

主催したのは「遺伝子組み換え作物に関する映画実行委員会」だ。代表の小島正美氏は長年、食の安全・安心について取材し、発信してきたジャーナリストで、この日の司会進行を務めた。

日本では遺伝子組み換え作物に対して都市伝説的な憶測が語られる一方で、なぜ商業栽培が実現されないのか、については真剣に議論されて来なかった。ロシアのウクライナ侵攻に端を発し、穀物やエネルギー価格が高騰し、食料安全保障のあり方が問われる時代へ。世界的に栽培が広がるGM作物は小規模な農家にもメリットがあることへの理解を広め、どんなGM作物が日本で求められているか、生産現場からの議論を促したというのが開催の狙いである。

フィリピンのGM作物 現地レポートを上映

この日の主役は、冒頭に弾き語りを披露した鳥取県の稲作経営者でユーチューバーの徳本修二氏（トウリアンドノーフ代表）。彼が製作した動画「世界はこんなに進んでいる！ アジア農業バイテク最前線」を上映した後、パネリストを交えて食料安全保障とGM作物の関係を考えるパネルディスカッションが行われた。

徳本氏は、昨年10月にフィリピンのマニラで開催された「第16回汎アジア農業者交流プログラム（Pan-Asia Farmers Exchange Program）」に参加し、ルソン島で除草剤耐性を持つGMトウモロコシ（BTコーン）を栽培する農家を訪ねた。動画では、その際の視察レポートに、同行したジャーナリストのコメントをまとめている。

同プログラムは農業分野のバイオ技術の知見を共有し、情報交換する目的で07年にスタートし、参加者はアジア各国の生産者、科学者や学者、メディア、行政職員など。徳本氏によれば「バイオ技術を活用して営農される圃場や研究施設、種子開発ラボの見学を通じて、



当日の会場の様子

いかに遺伝子組換え種子に対して科学的根拠に基づいた厳しい規制プロセスが適用されているか、人間や動物、環境にとって安全か、農場でいかに管理するか、そしてそれらが農家や農家が属するコミュニティにとつていかに有益かを「学ぶ」場であるという。

鳥取市内で水稲、飼料を約80haで作付けしている徳本氏だが、中長期的には1000ha以上の農地集積を視野に入れている。しかし、GM作物に関心があっても国内での商業栽培にはまだまだ時間がかかるため、海外でのGM作物の生産に意欲を示している。

ジャーナリストからは「フィリピンのほうが新しい技術を理解し



岸本華果氏



中森剛志氏



山根精一郎氏



徳本修一氏



小島正美氏

農業者は期待、消費者は……

で取り入れている。『失われた30年』は日本農業にも言えること。日本はなぜやって来られなかったのか?」「GM農産物を輸入しているのに、なぜ作れないのか?」という指摘があった。

デイスカッションには、徳本氏のほか、埼玉県加須市を中心に約200haで水稲、麦、大豆、トウモロコシを生産する中森剛志氏(中森農産(株)代表取締役)、東京大学在学中に貧困問題や環境問題の解決策としてフェアトレードやCSA(地域支援型農業)に関心を持ち、現在は生産と消費を近づける取り組みをしている岸本華果氏(株)雨風太陽・事業開発部門企画推進部)、元日本モンサントの社長でGM技術の理解促進に取り組んできた山根精一郎氏(株)アグリシーズ代表取締役)が登場した。

か。法律では日本国内でもGM作物の栽培は可能だが、近隣の生産者・消費者に理解してもらわないと実現できないと語った。

徳本氏は「日本で植えようと思つたら除草剤耐性のGM作物のベネフィットは考えにくい」と指摘した上で、日本海側の水田経営では湿田対策に機械や人力の限界を感じていることから「湿害耐性のある品種が欲しい」と要望した。その要望に対して、山根氏は現時点では湿害耐性のあるGM作物は聞いたことがないと述べた。

また、中森氏は就農から7年目で200haにまで規模拡大してきた経歴から飼料用でのGM作物には関心があるものの、消費者の反応を思えばすぐに作りたいとは言えない実情を吐露した。

一方で、岸本氏は消費者と生産者が分断されていることを指摘し、GM作物の商業栽培についても背景にある空気がそれを許さないのではないかと私見を述べた。

さらに、リモートでフィリピンから参加したトウモロコシ農家のアルバロス氏は遺伝子組み換え品種の導入で、1ha当たりの収量が600kgから7000kgになったと自身の経験を報告した。

ただし、生産の視点では、日本の商業栽培はともかく、世界の潮流がBTコーンになるはずという予測が語られる一方で、消費の視点ではGM作物を主食として食べたがっていないのは日本人だけが特別ではないという話題提供もあった。

GM作物に関心のある農業者は全国にいる

ワークショップ後の懇親会には、参加者の半数以上が残り、交流を深めた。筆者もその場で話を聞いてみたが、GM作物に関心を持ち、話を聞いてみたいと思った農業者が全国各地にいること、GM作物を栽培できる将来を見据えている人が少なくないことを実感した。その一方で、機械体系による乾田化で収量増を実現してきた経緯を踏まえて、GM作物の導入効果がどれだけ上乗せされるのか——フィリピンでの導入効果に匹敵する成果は得られないだろう。GM作物は悪者でもなければ、万能な新技術でもない。機械力に頼れない作業体系など、GM作物が必要とされる現場を見極め、建設的な議論が進展することを期待したい。

(加藤祐子)